

Title	アドルノと精神分析
Author(s)	太寿堂, 真
Citation	年報人間科学. 20-1 P.129-P.144
Issue Date	1999
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/8138
DOI	10.18910/8138
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

アドルノと精神分析

〈要旨〉

その「個人の危機」の現状理解のもと、アドルノはフロイトの精神分析から多くの知見を取り入れた。しかしながら、自我心理学につながる「統合の理想」や治療目標としての適応概念は、無力化する個人の最後の抵抗までも奪うと批判される。

アドルノによるフロイトの受容と批判を分かつ線は、両者の自我論の相違からも読み取れる。後期フロイトは自我の総合機能を重視したが、アドルノは自我の同一性の本質を「分散するもの、逸脱を促すものの経験」と「自己」との対立の中に見て取る。またエス、自我、超自我の統合を理想とした後期フロイトに対し、アドルノは自我の諸規定のもつ矛盾を強調した。アドルノは現代社会における合理的自我のエスへの後退という挑発的なテーゼをかかげたが、その論拠は個人心理の側ではなく、社会の「透明性の客観的な欠如」に見いだされた。しかし、ここで掲げられたいくつかの論拠から必ずしもアドルノのいう帰結が導かれるわけではないことも注意しなくてはならない。

キーワード

自我、反復、不可避性、防衛メカニズム、全面的社会化

太寿堂 真

フロイトの業績への評価と対決は、アドルノにとって思想の現在を、また何よりも現代社会における個人の在り方を解明する上で重要な手掛かりであった¹⁾。現代社会における「個人の危機」こそ、アドルノが批判的に対峙しようとする現状にはかならない。そしてその様相を個人の内部から探るうえで精神分析の洞察は比類ない価値をもつものであった。「否定弁証法」の一節では、アドルノの思考の射程と精神分析のそれとの交差する地点が簡潔に示されている。

「フロイトの心理学は個性性という仮象を織り上げるよりむしろ、それを徹底的に打ち砕く。(中略) 自我を防衛メカニズムや合理化の総体とする理論のねらいは、それと双壁をなす「自己」自身を支配する個人」という奢り、つまりイデオロギーとしての個人に拮抗する。客観的なものの優位を語るさらにラジカルな諸理論が打破しようとしたのもそれであった²⁾。

アドルノが今世紀の社会を「全面的に社会化された社会」とも「管理された世界」とも特徴づけたことはよく知られていよう。その社会において、自己保存を遂げようとする個人は、一般的趨勢が不透明なため、その認識と活動を自己の内に封じられ、あたかも「可避なもの」として現れる社会的諸力に適応を強いられると捉えられた。そのような認識に立てば、個人の決断を無条件なものと思想する実存主義などの思潮は、事態を隠蔽する効果ゆえに批判されざ

るを得ない。対照的にフロイトの自我論は、個人の内奥に深く分け入り、自我に課せられた内外の要求とそれを果たすことの絶えざる困難ゆえに主体の合理的判断が幾重にも無意識的な防衛反応と交錯する過程をたどることで、「自己」支配する個人³⁾の仮象性を明らかにする。まさにその作業こそが、諸個人のさらされている危機の様相を内部から読み解く鍵を与えると考えられたのである。しかしこのような分析がもたらすアンビバレントな帰結も示唆されている。

「この(人格性のイデオロギーの)解体はその後に残されたものの支配をますます可能にする。(中略) 精神分析は人間に自らを断念させ、その統一を告発するとともにその自律をも告発し、ついには合理化のメカニズムたる適応に服従させる」³⁾。

自我の限界を仮借なく解明した精神分析が、「社会の有用で生産的な価値」とされているものの内実を問わぬまま、そのものへの適応を治療の最良の目標とするとき、個人の自律性はいよいよ無化され、批判的認識の機会すら阻まれて危機を深めると論じられたのである。こうした精神分析への評価と対決のゆくえを、その基本概念の理解にまで溯って考察すること、それは、イデオロギーとしての個人主義を批判しつつも、「論争的な対抗イメージ」⁴⁾としての自律や自由の理念にあくまで踏みとどまろうとする「否定的弁証法」の屈曲した思考を解き、その射程を踏査する絶好の契機ともなるだろう。本稿では、こうした視座のもとに、アドルノによるフロイト受容と

批判とを分かつ線を、両者の自我に対する理解の相違に焦点をおいて探ることにしたい。

第一章 統合的自我と毀損

まさしく我々自身の「最も本来的な主体」であるこの私（自我）を客体として捕らえることができるのか。「続精神分析入門」の一節で、フロイトは哲学的ともいえる問いを投げかけている。可能だと答えが即座に返されるが、むしろその理由としてあげられた事態が人格を個体 (Individuum)、不可分の統一体とみなす常識を覆す。つまり「自我はその多くの機能を果たす最中に、少なくとも一時的には分裂しうる」というのである⁵⁵。自我の分裂とは、例えば、欲動の充足が耐え難い脅威を招くとき、その現実を承認し充足を断念するか、または現実の脅威そのものを否認するかの葛藤によって生じる事態である。このような例によって、心的諸過程を総合する自我の機能が決して自明なものではないことが明らかにされた。フロイトによれば、総合する機能は、「特殊な諸条件に制約されており、あなたの障害に打ち負かされる」のである⁵⁶。その解明をつうじて自我は、「構造によってあらかじめ規定された境界をもついくつかの断片」として再発見されることになる。自我の性格は、内に多岐にわたる要素を含んでいる。「かつての両親の法廷、(審級)」が内面化され、自我を監視、命令する超自我の働き、自我に感化を及ぼす諸々の他者との同一化、放棄された対象関係の沈殿物としての同一

化など、内なる非自我的なものとの力動的な関係の舞台として自我の性格は捉え直された⁵⁷。

このように、様々な障害により人格という統合体が裂開する諸局面をてがかりに、その構成要素を分離して解明 (Verleugern) するフロイトの思考様式は、アドルノの精神分析理解の核ともなっている。一九四六年のロサンゼルス精神分析協会での講演にもとづく論考『修正された精神分析』はそのことを印象的にあらわしている。そこでは「心的なものが有機的な構造をもつという神話を打破したこと」がフロイトの最大の功績として強調されている。この論文はホーナイン、フロムらフロイトの精神分析を「修正」する動きに対してフロイト的アプローチの擁護を試みたものであるが、その中で、修正派の打ち出した統合的な性格概念に対してアドルノは次のように述べている。

「フロイトに幼児期の個々の出来事を重視するきっかけをあたえたのは、彼がそう言うわけではないとしても、損傷 (Beschädigung) の概念である。(中略) 大抵の修正主義者がそうであるように、現代社会を批判するものは、この社会が衝撃のうちに経験されることから注意を閉ざしてはならない。つまり社会からの個人の疎隔に制約された、予期せぬ不意の衝撃である。修正主義者たちは性格を具体化しているが、性格とは連続的な経験というよりむしろ、はるかに高一度合いでそのような衝撃の作用した結果なのだ。性格の総体性 (という観念) は虚構である。性格とはいわば、苦痛のもとでのみ、

しかも完全には統合されぬ癡痕のシステムだといえるだろう」⁸⁾。

議論の直接の背景は、幼児期の外傷的事件の評価をめぐる問題であり、フロイトが過去の「孤立した経験」を過度に重視するとしたホーナイが、後年の反応はあくまで発達過程における「経験の全体から形成される性格構造」から理解されなければならないとしたことであつた⁹⁾。このような文脈で強調された性格構造の全体論的把握についてアドルノは、「人格の統一への調和主義的信仰」を含むと評する。それが批判されるのは、自我の形成過程において第一次的な外傷的諸経験や苦痛を無害なものとして軽視する態度と不可分だからである。また、去勢の威嚇のような脅威の現象を「両親の愛情欠如」のような穏便な問題にすり替えて再解釈することは、彼にいわせれば「精神分析の去勢」に等しい。このように、修正派の有機的人格概念が心理学的認識に突きつけられた棘をやすやすと度外視するのは対照的に、フロイトは個人に内面化される暴力を銘記しつづけたと理解される。そしてそのことが、自我の性格と社会環境の直接的な影響関係を考慮しようとする修正派の人々よりも、かえって個人の内なる「社会的毀損 (gesellschaftliche Verwundung)」についてより多くの認識をもたらずと判断されるのである。

ところで、アドルノが強調する外傷の第一次性、その作用結果としての性格形成、そして人格の統合の非完結性とそれを保持するための苦痛などの現象は、ある特徴的な場面を想起させずにはおかないだろう。それは外傷的なものが想起されぬまま反復強迫や防衛反応のうちに行爲として現れ、それが自我の恒常的な傾向に、その性

格特性にさえなっている事例である¹⁰⁾。しかし、仮にそれが念頭におかれているとするならば、このような事例に典型的にみられる微候から、直ちに自我の統合や様々な性格形成を一般的に理解する手掛かりをうることができるのか。いや、むしろ次のように問いを立てるのが適切かもしれない。すなわち、その性格形成の多様性にもかかわらず、「完全には統合されぬ癡痕」に譬えられるべきものが諸個人の内にあまねく潜在しているといえるのだろうか。さしあたり、フロイト自身の見解を確認してみよう。分析治療について述べたある論考の中では、神経症患者の「自我から分離され、自我外のもの(抑圧されたものー筆者)に結び付けられていたあらゆる欲動の動き」が治癒の過程で「自動的」に「自我という大きな統一に適合する」と述べられている¹¹⁾。これなどをみるかぎり、先に引用したアドルノの表現とは相いれない。なるほどフロイトは精神疾患者の場合に限り、健康者の夢や錯誤行為の分析からも、統合的的自我から抑圧されたものが分離しているのを見とどけたし、抑圧されたものから派生する不安によって自我の安定性が動揺にさらされることを指摘した。しかし後期には、このように心的諸過程を総合し、統一を与え、自我の傾向を重視するようになっていく。それを常に支障なく成し遂げる「健康な自我」とは治療上の理想であり、総合機能に障害のある精神疾患者の自我との差は程度の差でしかないとしてもである。

この統合的自我の評価をめぐって、フロイトとも微妙に異なるアドルノの理解の特徴が浮かび上がってくる。それは彼のフロイト受

容と批判という二つの局面を分かつ重要な論拠の一つといつてもよい。『啓蒙の弁証法』の中でホルクハイマーとアドルノは、自我の統一とその保持の努力がもたらす代価を、市民社会の文明史的根源に溯つて次のように叙述している。

「自己同一的、目的志向的、男性的な人間の性格が創出されるまでに人類は恐るべきことを自らに加えなくてはならなかった。その幾らかは誰の幼児期にも反復されている。自我のまとまりを保持する努力はあらゆる段階の自我につきものである。そして自我を保持しようとする盲目的覚悟にはつねに自我を喪失する誘惑が伴っていたのである」¹²⁾。

「恐るべきこと」とは自己保存の達成の努力が自己および他者にもたらす様々な毀損である¹³⁾。まず、圧倒的な暴力から逃れるとともに他者支配のため展開される狡智がそれであり、次に、他者のみならず自己自身にさえ行使される欺瞞であり、さらにはそれと密接に関連して成立する「犠牲の内面化」、つまり欲動の制御と自己支配に基づく生存様式がそれである¹⁴⁾。彼らは市民的個人の類型の系譜を辿り、その理性と自我の統一性が、系統発生的にも個体発生的にも圧倒的な外界の諸力のもとで自己保存を達成する必要に強いられる形成されるとみなす。さらにこの統一が成立した後も、自我は引き続きそれを喪失せぬよう保持する努力を繰り返さなくてはならないと理解され、自我から分離されたものが「自動的に」統一に服す

る場合とはうらはらである。その理由は次の引用からもある程度読み取れよう。それによれば、自己保存の論理に従う統一的な自我は、その論理とは相いれず自己を分散しかねない多様な衝動を経験することになる。それを否定し、それと対立する中で自己統一をそのつど堅固にしていく行為の反復的な強制力によってのみ統一は確立される。

「自己をその論理の道筋からはずれさせる危険な誘惑の数々に、彼は繰り返し新たに身をゆだねる。(中略)彼の同一性の本質をなし彼の生存を可能にする知の実質は、幾多にも相い別れ、逸脱をうながし、分散するものを経験することまつわっている。(中略)意識して生き抜く者は死の脅威に大胆に身を委ねる者であり、それに接して彼は生に対して堅固になってゆく。自己は冒険と堅く対立するのでなく、むしろこの対立を通じてはじめてその堅固さの中で形成される。自己の統一は一とえにその統一が否定しているものの多様性においてのみ形成されるのだ」¹⁵⁾。

喪失の脅威にさらされながら、これを再現するような行為を能動的に反復することによって欲動放棄、内外への支配の図式が形成されるというこの考察のエッセンスは、フロイトの『快感原則の彼岸』の中で有名な幼児の糸巻き遊びの解釈を彷彿とさせる。ただ、アドルノ達によれば、統一を保持する努力とその喪失への誘惑や脅威との分裂は、個人の発達レベルの相違、市民社会の歴史的発展形態

の相違を問わず「あらゆる段階の自我につきもの」なのである¹⁶。こうして内面化された犠牲の儀式は市民社会の歴史を通じて反復され、それを挙行し続ける諸個人の毀損ははまだ解消されず、その生存様式は当の主体にとつては逃れ得ぬ強制連関になつていと理解される。しかし、なぜ市民的自我の毀損は癒されないのだろうか。たとえ自己支配と犠牲の内面化によつて「全面的で普遍的で分断されていらない幸福への衝迫」¹⁷が断念されなくてはならないとしても、合理的な現実認識によつて、より確実な補償を期待できればよいのではないのだろうか。それが十分であるかないかは、まずは自己保存という基本的な関心が満たされるかどうかに関わるだろう。そして自己支配の図式は、自己保存の達成を脅かす可能性を内的諸制約により排除しえないと考えられるのである¹⁸。この破局的帰結にいたる可能性についての様々な議論を分析すれば、アドルノはおよそ二つの事柄を前提としているといえるだろう。

(一) 市民的個人が自己保存の遂行のため行使する狡智は、「不可避」と目される現実の趨勢に直面すればこれに同化適応しようとする身体的・心的傾向に制約されているという見方である。これを自己保存的合理性の主観的被制限性と呼ぶことにする。

「市民的理性はより大なる力として立ちあはだかる非理性に同化適応(Angleichung)する、その狡智の中に理性の非合理性は表れてくる」¹⁹。

(二) 一定の社会的制約のため、個人の生活を成り立たしめる客観的諸制約が当の個人にとつて不透明であり、そのため個人の主観的

態度決定に先行する社会は個人にとつて免れがたい「強制」という性格を帯びているという見方である。これを客観的被制限性と呼ぶことにする。これについては第三章で触れる。

このようにして、堅固で統一的で目的志向的な市民的自我は、自己を逸脱させ分散させかねない内なる諸衝動との対立や他者との相克ばかりでなく、自らの行使しうる合理性の限られた作用域と自己にとつて不透明な客観的諸制約との疎隔にも制限されていると考えられる。そのことから派生する破局的の可能性を廃しえない以上、社会的支配や暴力の直接の犠牲者はいうに及ばず、たとえ偶然的に幸運に恵まれている者ですら、毀損は真に癒されているとはいえない、というのが著者たちの真意ではあるまいか。それは欲動放棄に代えて、現実原則のもとでより確実な成果が保証されるとしたフロイトの見方を覆す議論である。

第二章 統合という理想と虚偽の宥和

さて、自我の統一をめぐる見解の相違を再びアドルノのフロイト理解の中に追つてみよう。アドルノの論文「社会学と心理学との関係について」(一九五五年)の中では、先に確認した相違は、フロイトの晩年の著述から自我心理学にうけつがれて展開された治療的理想、すなわち「よく統合された人格的理想」に対する根本的懐疑に顕著に現れている。その理想とは、自我の行動が、エスの要求、超自我の要求、現実の要求を同時に満たし、三者を調和させることを

目標にするものだが²⁰、しかしアドルノによればこの目標は退けるべきものである。なぜなら「それは既存の社会で存在せず、存在するはずもない諸力の均衡を期待し、またこれら諸力が同等の権能をもっていないから」である²¹。要するに、精神分析が自我とエス、超自我の葛藤として描いた不調和は、諸個人を拘束する社会の客観的な諸要因に規定されて生じるものであり、そのため個人の心理内で直ちに解消を期待することはできないというのである。これは精神分析にとつては外在的な論拠であるが、その論拠の一端は、統合の要となるべき自我の諸規定が、フロイトも認めずにはいられない難問をかかえていることからもうかがわれている。抑圧が端的な例である。つまり、「自我は意識であり、抑圧に對立するものだとされながら、それ自身、無意識的なものとして抑圧を遂行する審級でもある」という矛盾である²²。

周知のように、フロイトのいわゆる第二局所論では、自我は外界の影響のもとに、エスから分化して機能していると考えられる。外界との関係は自我には決定的なもので、それに適應するためエスに對して外界の代理人の役を果たす。自我は、現実検討の働き（内部からの興奮が対象知覚に影響して幻覚が生じるのを防ぐ）を担うとともに、エスの直接的で危険につながる要求を延期し、欲求と行動の間に思考の作業をもうけ、現実原則のもとでより確実な成果を保証するとされる。こうした点で自我の活動はあくまでも意識に媒介され、目的―手段関係からみて「合理性」を備えているかみえる。しかしながら、抑圧されたものの想起に抵抗する自我の働き

は、この位置づけには適合しない。この抵抗する自我の働きは、抑圧されたものが意識にのぼる傾向をもつとすれば、抑圧を保持しているのは何かという疑問からフロイトが最終的に出した答えであった。そしてこの抵抗は意識的な行為ではないため、抑圧に固執する自我の機能は無意識的に果たされるとせざるをえなくなつたのである²³。またそもそも、そのエネルギーをエスから借り受けている点では自我の独立性は弱い。かくて、自我の機能は、外界の観察によつて内部の欲動の動きからある程度分化しており、また抑圧されたものから分離したものでありながら、同時に無意識的でもあり、あたかも抑圧されたものと同じに振る舞いもするという難問が認められる。アドルノはこの難問をあえて矛盾として強調するわけである²⁴。さらに彼は欲動にたいする自我の「抑圧」と「昇華」、否定的機能と肯定的機能を体系的に区別する基準も不十分であるとしている。禁ぜられた欲動の達成を妨げ、それと結びつく表象を意識から隔離する抑圧と、欲動の目標を社会的評価をうける対象へと置き換える昇華の違いは、結局、その行為の「社会的有用性、生産性」の有無に求められており、それは心理学（精神分析）の準拠枠からすれば全く外在的な尺度を無批判、無条件に引き合いに出す態度だといふのである。このように、アドルノは精神分析の論じる自我の機能の首尾一貫性の欠如をあげながら、それはフロイトの論理的誤謬の罪ではなく、「生きる必要（Lebensnot）」、つまり自己保存のための社会的要件から自我に強いらられる矛盾だとする。そして、現代の「非合理的な」社会のもとでは自我は社会により配分された機能

を適合的には果たしないうし、自我のおかれた二律背反的状况を強調して次のように述べる。

「現実において自己を主張しうるためには、自我は現実を認識し、意識的にその機能を果たさなくてはならない。だが、個人は自らに強制された度重なる無意味な断念を行わなくてはならぬため、自我は無意識の禁忌をたて、しばしば自ら無意識の中に自己を抑止せざるをえなくなる」²⁶。

要点は、無意味な断念を甘受し続けることから、対象認識や自己意識の活動も相対的に抑制されざるをえなくなるということ、つまり外的条件に強いられた欲動放棄の合理性の欠如が自我の合理的機能の後退につながるという見方である。そのため、合理的自我とエス、超自我との分化は部分的に掘り崩されることにもなる。

「合理的自我は自らに対して無意識的となり、自らが再度それを克服すべき欲動力学に巻き込まれざるをえない。自我は自己保存のため自我が遂行する認識活動をやはり自己保存のため繰り返し中断し、自己意識を断念せざるをえない。(中略) 自我はリビドーの欲求を代理しながら、それと一致しがたい現実の自己保存の欲求をも代理しなければならぬ以上、絶えず過大な要求を課せられる。自我はエスに対して自ら主張する堅固さと確実性を決して我が物にしてはいない。……自我がおのれ自身のもの、つまり(エスから)分化した

ものであることに失敗する時、自我は最も類縁の深いフロイトのいう自我リビドー(の対象になること)へと向かうか、あるいは少なくとも、その意識的機能は無意識的機能と融合される」²⁶。

自我が欲動力学にまきこまれるといつても、『啓蒙の弁証法』の根源史で描かれた統一的自我に対するあの分散する諸衝動が拘束を解かれるわけではない。「社会を代表するものとして自我が獲得した諸特質」つまり所与の社会的压力のもとで自己保存と適応を果たそうとする行動準則は保持されている。ただし、その経験は当の個人に社会的無力を意識化させずにはおかず、自我にとつてはそれが脅威となるため、合理的判断とならんで、またそれ以上に合理化や抑圧などの非合理的、無意識的な防衛の働きが自己保存の遂行と不可分に結び付くことになる。そしてこの防衛メカニズムは、それなしには「衝動の多元性に対する自我の同一性など考えも及ばない」ほどに自我の内的核心に食い込んでいと想定されるのである²⁷。これが「意識的機能と無意識的機能との融合」として幾分誇張して論ぜられた事態である。一方、社会の客観的諸条件と個人心理との隔絶により、現実的諸目標からはねのけられたリビドーは主体自身に向け代えられる²⁸。そして、自我の防衛はこの「いわば混濁され、昇華されず分化されていないリビドー」の補強をも得つつ遂行されていると論じられた。つまりアドルノによれば、現代社会に生きる個人の心理においては、抑圧をはじめとする防衛の働きが自我の同一性を辛うじて保持しており、またその活動は、フロイトが「自己保

存欲動をリビドーの面で補強する」と特徴づけたナルシズム的な欲動に支えられているのである。

ところで、ここで注意しなくてはならないのは、現代における個人の無力を心理的に補償するこのようなナルシズムが決して無傷の形で存続するものではないということである。アドルノはフロイトの「集団心理学と自我の分析」を援用しつつ、ファシズムのプロパガンダが一定の効果を持ちえたのは、集団指導者に自己を同一化させ、同時に彼の像を理想化することによって、経験的な自己イメージを損なう欠如を免れた形で自己愛を充足させようとする傾向に對してであるとした²⁹⁾。そのような「社会化されたナルシズム」によつて一時的にも内的葛藤が宥和され、人格が統合されたとしても、それはまさに現実を見通す意識を抑圧する虚偽の宥和であろう。

第三章 合理性と非合理性の交錯、その社会的条件

それにしても、合理的自我の機能はなぜ後退を余儀なくされるのか。「度重なる無意味な断念」によるとの理由づけは、明白な窮乏状態を除けば、個人が意味を見いだす目標や価値の多様性に應じてその「無意味さ」の一般的判断基準を見いだしにくくなるだろう。しかもアドルノのいう「幸福」があまりにも規範的であり、後期資本主義社会のもとで個人に直接的に与えられた一切の充足、すなわち物象化、局限化された充足の諸形態を否定するのであつてみればなおさらである³⁰⁾。また、個々人の主観的充足感の尺度は「社会にお

ける力関係」に規定され、その変革への断念を前提としながら、それを補償する心理的な合理化機制に覆われたものと理解される。それ自体としては示唆的な議論ではあるとしても、断念の質および程度と合理的自我の機能の衰退の相関性を推し量る基準はいよいよ見いだしがたい。

しかしそのことで議論の示唆したこと全てが失われるわけではあるまい。中でも、現代社会の生活形態が個人心理の中では容易に解消しがたい緊張や圧迫を個々人の自我にもたらし、それを緩和し、補償するため主として消費生活においてナルシズム的な欲動が喚起されるといふ見方は注目し値するだろう。またファシズムの宣伝や文化政策がそれを政治的に動員したとする指摘も抜き難い。そこで今、この問題をさらに考察するには、別のより有望な論拠を探る必要がある。だが、それは一旦精神分析の問題から離れることを意味する。アドルノ自身、心理学的解釈の適用に関する限界を再三にわたつて指摘しているのである。つまり、精神分析は、家族内の葛藤など個人の私的領域、経済理論的には消費領域に限定された問題を扱ってきたが、社会的生産の諸条件は度外視されてしまつていくというわけである。彼によれば、心理学的な概念は、「心理的ではない合理性に對し、非合理的な心理が對立する点においてのみ」実質をもつ³¹⁾。つまり占星術の流行やファシズムのプロパガンダがねらう効果など、社会的行為の目的合理性という尺度から漏れ落ちる現象の解明にあてられるのである。とはいえ前章でみたように、アドルノの主要な関心は、市民的自我の活動が、合理的尺度によりながら、

「非合理的」な心理的力学とも不可分に交錯する事態にあつた。そこで、次に、合理的行為様式を身につけているはずの個人に、そのような「非合理的」な心理が作用する客観的・社会的条件として提示された論拠を手短かに再構成することにした。

(一)「全面的に社会化された社会」の不透明性

アドルノは現代社会を「全面的に社会化された社会」と呼び、生産、分配、支配の各装置、並びに経済社会関係とイデオロギーとが不可分に絡みつつ展開される過程と捉えている。そのもとでは、「ある状態の原因を明証的に他の個々の状態に帰することができない」。「いずれの状態も他の全ての状態と関係し、一切が一切に浸透されている」。それは社会事象を因果関係的に理解するのを困難にする。この因果帰属にもとづく認識の危機は、「現にあるものは不可避であり、そのために正当である」という仮象に容易に移行しかねない³²⁾。

(二)物象化された社会関係の諸個人からの自立化

資本主義社会のもとでは、商品形態での交換が社会化(Vergesellschaftung)の基本形態であると考えられ、また個人の行動様式を共通分母のもとに成り立たせる要件は「交換価値に即した振る舞い」だとされる。このような社会関係が一般化するにつれて、諸個人は相互に没関係的になるとともに、諸個人の活動がその成立と維持に貢献している全体社会と個人との関係も個人にとって見通し難くなる。そのことはまた、個人が自らの生活を首尾一貫して見

通すことを不可能にする。

「先進社会では誰もが(結果を)見積もるにもかかわらず、誰もが自分の生活を全体として見積もることはないし、己れの諸行為の帰結を首尾一貫して見積もることさえない」³³⁾

(三)管理された社会のもとの従属傾向の助長

第二次大戦期、アドルノはホルクハイマーとともに、権威主義的國家の成立をめぐる議論に加わっていた。ポロツクのいう國家資本主義、すなわち國家官僚と産業界の管理層との連合によるマクロ計画のもとに需給の調整をはかるメカニズムの成立がその政治経済的枠組みである。これに加え、労働組織の独占体への移行により階級内支配が成立するとともに、労使双方の指導層の協調がはかられる。

そのような体制のもとで給付される社会補償への期待や消費生活の促進などにより、連帯よりもコンフォームイティの方が現実的に合理的な時代が到来したと考えられた。そのもとでは「社会生活そのものが個人の独立性とイニシアティブを期待していた」リベラル資本主義の状況とは異なり、社会的事柄の決定に対して諸個人の選択の範囲が予め狭隘化しているとされる。

「徹底して社会化された社会においては、決定がなされる状況が大抵は予め指定されており、自我の合理性はささいな処置の選択に切り下げられている」³⁴⁾

ささいな処置の選択とは、そのつどの局面で自己保存に有利な「現実的」判断を下すことである。この意味でアドルノは、全体主義の時代において人々が「非合理的」に振る舞ったというテーゼは全面的に正しいとはいえないとしている。つまり、その体制下に生き人々が当時には予測しえなかつた破局的帰結のため、後から非合理なものとして評されるわけである。

(一)は一九六六年、(二)は五五年、(三)は四十年代から五十年代というように、語られた時代状況は異なる。又(一)、(二)は市場における交換が世界規模で拡張する状況に対応しているが、(三)はファシズム体制に象徴されるように、市場の機能が経済に対する「政治的なものの優位」のもとに権威主義的国家の中で再編される状況であり、互いに相容れぬ要素をもっている。しかしアドルノはこれらを区別していない。むしろいずれの場合も、透明性が客観的に欠如し、社会の一般的趨勢に対して諸個人の合理的認識と行為が制限される中で、現存するものが諸個人の意識には「不可避なもの」として現れるという点が強調されるのである。そのような被制約性を前提にしたうえで、個人が社会的に無力を経験せざるをえないということ、またその意識化を免れるため個人の「合理的」態度には多分に心理的防衛の要素が入り交じるという事態が論ぜられたのだった。

しかし、社会の不透明として挙げられた様々なアスペクトの内実を検討してみると、なるほどそれらは諸個人の不安、さらには心理

的防衛の働く一定の客観的・社会的要因にはなりえるとすると、諸個人の振る舞いが社会の支配的諸関係への同化、適応に一樣にゆきつく根拠になるとは限らないという疑問が生じてこよう。むしろ(二)のような不確実性が増すことによつて、事態は不可避なものとして諸個人の意識に現れるどころか、むしろ逸脱的社会化の可能性が高まつたと見なされる場合も考えられなくはない。また社会の一般的諸条件というマクロ次元と個人の心理というミクロ次元の変動を相関させるのみでは、議論の是非を判断する指標として不十分との誇りは免れまい。より中間的な領域、すなわち諸個人が実際に自己形成を遂げる家族、集団、学校など様々な場、そこでの間主観的な相互作用の諸局面にも目を配らなくてはなるまい。その局面的部分的な考察は、三十年代以来の社会研究所の家族研究でなされ、アドルノの議論もその考察と独特の関わりをもっているのだが、その議論については様々な角度から批判がなされている⁽³⁵⁾。以上のように残された諸問題を批判者たちの議論も交えつつ検討せねばならないが、その機会は別稿に譲ることとしたい。

注

(1) アドルノの精神分析との取り組みは、すでに彼が独立した思想家としてのキャリアを歩み出す以前に始まっていた。一九二七年、教授資格申請論文として提出された「超越論的心理学説における無意識の概念」の中で、フロイトは「欲動に形而上学的意味を負わせるパトスなしに」無意識の事実を説明したとされ、有機的生

の神格化や存在論的性格学などの潮流に対抗する「啓蒙の武器」と評価されている。その後、三十年代の書簡などでは、フランクフルト社会研究所の家族研究の基礎となったフロムの社会心理学のパラダイムに対し、「個人心理学を社会理論へと亀裂なしに移し変える」との批判を加えている。これは、フロイト理論の社会心理学的应用に関して別の方法的枠組みを提起する必要を匂わせるものである。(一九三四年十一月二十四日、ホルクハイマー宛書簡) Max Horkheimer Gesammelte Schriften Band 15, Fischer Verlag GmbH Frankfurt am Main, S.275 後に取り上げる四十六年の講演ではその批判が全面的に展開された。その中でアドルノは、物象化され、社会からの疎隔のうちに自己内に閉塞を余儀なくされた個人の意識を念頭に置き、個人の意識には直接現れないまま個人の行為を規定する社会の力学に注意を促す。そして精神分析的な社会心理学の課題は「個人の内奥のメカニズムの中に規範的に働く社会的な諸力を発見すること」にあるとされ、その視座のもと、個人心理の解明をてがかりに集団心理の問題にも着手したフロイトの方法を改めて受容するという方向が鮮明にされたのである。そうした構想と『啓蒙の弁証法』の叙述との相関関係は従来から十分に議論されてゐる。

Vgl. Wolfgang Bonss, Psychoanalyse und Kritik, Zur Freudrezeption der Frankfurter Schule, in Sozialforschung als Kritik, stw400, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1982, S.367ff. Gunzeln Schmid Noer, Nachwort des Herausgebers, in Max Horkheimer Gesammelte Schriften Band 5, Fischer Verlag GmbH Frankfurt am Main, 1987, S.423ff. マーティン・ジェン「亡命中のフランクフルト学派」『永遠の亡命者たち』今村仁司他訳 新曜社 一九八九年、第三章。徳永恂「初期批判理論と精神分

析」岩波講座現代思想 第八巻『批判理論』一九九四年、岩波書店、第一章。ほか

- (2) Theodor W. Adorno, Negative Dialektik, stw 113, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1988, S.345. (以下) の著書からの引用は N.D. と略。
- (3) Theodor W. Adorno, Minima Moralia, Bibliothek Suhrkamp 236, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1989, S.76f.
- (4) Vgl. N.D. S.222. 「自由と強制」 社会的強制のものと自律の苦痛に対する論争的な対抗イメージであり、非自由とはその強制の似姿である。……自律があるか否かは、自律に敵対し矛盾するもの、つまり主体に自律を保証したり拒絶したりする客体によって左右される。客体から切り離されれば自律は虚構である」。
- (5) Sigmund Freud, Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse, in Sigmund Freud Studienausgabe Band I, S. Fischer Verlag GmbH, Frankfurt am Main, 1969, S.497f.
- (6) Sigmund Freud, Die Ichspaltung im Abwehrvorgang, in S. Freud Studienausgabe Band III, S.392.
- (7) Sigmund Freud, Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse, a.a.o., S.503.
- (8) Theodor W. Adorno, Die revidierte Psychoanalyse, in Adorno Soziologische Schriften stw 306, Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main 1979, S.24. (以下) の論文集からの引用は S.S. と略。
- (9) カレン・ホーナイ『精神分析の新しい道』安田一郎訳、誠信書房一九七二年。性格構造の重視の主張はフロイト以降の精神分析の展開の中では広く共有されているようだが、ホーナイの論拠にも筆者として学ぶ点があった。ただ、ホーナイによる外傷概念の理解はフロイトの考察した外傷の意味や効果の「事後性」の問題を

度外視しており、決定的な批判になつているとはいえない。同書、28頁以下参照。なお、ここでの議論にもかかわらず、アドルノも参加した『権威主義的パーソナリティ』研究では性格構造の概念が基軸とされており、性格構造を有機的総体とみなす考え方への批判は、性格構造概念そのものを撤回する方向にいきつくわけではなかったといふべきだろう。

- (10) 実際、反復強迫をめぐる評価がここでの重要な争点の一つのだが、それは彼がフロイトから学び取ろうとした人格や自我の本質への洞察とも関わる事柄だろう。ホーナイは反復強迫の仮説を退け、個人の発達過程を重視せよと訴えるが、アドルノはこの主張に「どの時代にも新しいことが可能だ」とする信仰を見いだし、規格化された商品を「これまでにないもの」と宣伝する同時代の反復的な生産方式と等価なものを読み込む。そしてむしろ「反復に言及し、見かけは新しいものの中に常に同じ否定的なもの (das negative Immergleiche) をあくまで見とどける場合にのみ、理論はこの常に同じものから新しいものの約束を奪い取ることもできるかもしれない」とさえ語る。(Ebd.S.37) こうしてアドルノは、「心的諸反応の反復」という同時代の一般的な行動様式を引き合いに出し、そこから市民社会がすでに克服したはずの「アルカイックな特徴」の再帰する歴史的現状までも見とどけようとする。

- (11) Sigmund Freud, *Wege der psychoanalytischen Therapie* in S.Freud, *Schriften zur Behandlungstechnik*, S. Fischer Verlag GmbH Frankfurt am Main, 1975, S. 243. アドルノはこの箇所を含む文章を『社会学と心理学との関係について』という論文で引用している。ここでのフロイトの文章の文脈は、「病める精神生活の分析の後には総合がなくてはならない、精神分析が分解してしまつたものを再建設しなくてはならない」と訴える「精神総合」

論者への反論である。アドルノはこれを参照して、「フロイトによる鋭い論争は、悪しき古き人格概念のみえすいた模造品である『統合という理想』(後述)にも敷衍されなくてはならない」と述べている。Theodor W. Adorno, *Zum Verhältnis von Soziologie und Psychologie* in S.S.566.)

- (12) Max Horkheimer/Theodor W. Adorno, *Dialektik der Aufklärung*, in Max Horkheimer *Gesammelte Schriften* Band 5, Fischer Verlag GmbH Frankfurt am Main, 1987, S.56 以下この著書からの引用は D.A.省略。

- (13) このような文脈での「毀損」という表現については例えば次の箇所を参照。「狡智のもつ虚偽性の中で、すでに犠牲に含まれていた欺瞞は性格の要素となり、この狡猾な人物自身を毀損 (erstimmung) する。その相貌には彼が自己保存のために自己に対して加えた諸々の打撃の跡がある。」Ebd.S.80.

- (14) Ebd. そのフロイトの現実原則との類似性は明らかだが、この書物では、現在の支配関係への同化の不可避性が強調され、快樂原則の合理的延長という側面よりも、その実体性の希薄さが示唆される。D.A.S.74. またその生存様式は自らの利益と矛盾する結果となりかねない力を容認しようという意味で非合理なものを宿していると考えられる。注19参照。

- (15) D.A.S.71.

- (16) この「あらゆる段階の」という表現を、ジョエル・ホワイトブックはいみじくも強調した。ジョエル・ホワイトブック『倒錯とエリートピア』桑子俊雄／鈴木美佐子訳、青土社1997年、167頁参照。本章の主題に関して、この書物から多くの刺激を得た。

- (17) D.A.S.81. その際、注意すべきことある。アドルノは断念された幸福要求の問題と自己保存の達成に対する脅威の問題を明確に区別

しないが、議論の混乱をさけるためには、両者の条件を区別しながら議論を再構築する方がよいだろう。なおアドルノの幸福の理念については注(20)を参照。

(18) ここではさしあたり次の箇所のみをあげることにする。

「手段を目的として祭り上げることは後期資本主義において明白な狂気の性格を帯びているが、主体性の根源史に早くもそれを認めることができる。人間の自己を基礎づける自己自身への支配は、潜在的にはつねに当の主体の無化である。というのも支配され、抑圧され、自己保存によつて分解された基体とは、自己保存の活動がひとえにその機能として規定され、まさにそれこそが保存されるべき「生けるもの」(das Lebendige)なのだから」。D.A.S.76. この一節はあまりにも有名だが、外的諸条件との関連を酌量することなく、自己支配からあたかも直接的に自己保存の解体の可能性を導出する文意であるため批判的となつてゐる。例えば、ハーバーマスの次の論述を参照。「ルカーチは物象化の概念によつて人間相互の関係と主体性を物的世界に同化させるような独特の強制をあらわした。ホルクハイマーとアドルノは、この概念を資本主義経済システムの成立をめぐる特殊な歴史的文脈から切り離すだけでなく、人間の相互関係の諸局面からも切り離し、さらにこれを時間的にも、事柄の面からも一般化する。」Jurgen Habermas, Theorie des kommunikativen Handelns Band I, edition Suhrkamp 1502, Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main 1988, S.508. しかしアドルノの諸著作の中に自己保存の達成に対する脅威の諸条件と社会的諸条件との関連を辿ることは必ずしも不可能ではなご。

(19) D.A.S.85.

(20) Sigmund Freud, Abriss der Psychoanalyse, in S. Freud

Gesammelte Werke, Band17, Fischer Verlag Frankfurt am Main, 1966, S.69など、自我心理学における統合の意義については、小此木啓吾『現代精神分析の基礎理論』弘文堂1984年、128頁以下の記述が総括的な知識を与えてくれる。

(21) Theodor W. Adorno, Zum Verhältnis von Soziologie und Psychologie, in S.S. S.65.

(22) Ebd., S.71.

(23) フロイト自身の表現としては、たとえば次の記述を参照。「ところが、この抵抗は確かに自我に由来し、自我に属するので、我々はこれまで予見していなかった状況に直面する。我々は自我そのものの中に無意識的でもあるもの、あたかも抑圧されたものであるかのように振る舞うものを見いだしたのだ。」Sigmund Freud, Das Ich und das Es in Psychologie des Unbewußten, S. Freud Studienausgabe BdIII, S. Fischer Verlag GmbH Frankfurt am Main, 1975, S.287.

(24) なおフロイトは『続精神分析入門』の中で、心的装置のうち、直接外界に向けられた最上層部にあたる知覚—意識システムと自我との関係に注意を促し、「知覚—意識システムが機能している間、意識という現象が成立する」としたが、アドルノは自我の外縁部に意識現象を限定するこのトポロジーが矛盾を「極めて不完全にしか評価してゐない」と述べる。彼は、客観的、社会的制度に対応する自我の目的合理的モメントとその残余である心理的モメントとの相克を強調する。

(25) Theodor W. Adorno, Zum Verhältnis von Soziologie und Psychologie, in S.S. S.71.

(26) Ebd.

(27) Ebd., S.81.

(28) Ebd., S. 22f. 23 でのナルシシズムの叙述はフロイトのそれを応用したものである。アドルノはフロイトの『ナルシシズム入門』を彼の「重要な発見」としているが、ここでの文脈は「自我とエス」の次のような記述を参考にすると分かりやすい。「自我のナルシシズムは二次的なもので、つまり対象から撤収されたものである」。Sigmund Freud, *Das Ich und das Es*, a.o., S. 317. 例えば、愛する対象が喪失する事態にさいして、自我は放棄された対象の特徴を自らに取り入れこれに同一化しつつ、自らの性格を変容させる場合がある。フロイトによれば、それはエスに対して失われた対象に代え自らを対象とするよう求める行為であり、放棄された欲動をナルシシズム的なものに転化して代償する意味をもつ。自我はその振る舞いによってエスを制御しようとしているが、他方では「エスの体験に大幅に順応するという犠牲を払う」。(Ebd., S. 297) これは対象に対する敵意を内在化させ、自己自身に向けることにもなりえる。

(29) Vgl. Theodor W. Adorno, *Freudian Theory and the Pattern of Fascist Propaganda*, in S.S., S. 419.

(30) 『否定的弁証法』(1966)では、幸福は「今(この)個々の人間の幸福とは宥和しえない」もの、自己閉塞的な存在形態から個人自身が解放される時、はじめて生じるはずのものであると定式化された。N.D., S. 346. このような幸福の理念の萌芽はすでに40年代の『啓蒙の弁証法』や『ミニマ・モラリア』にも認められる。特にD.A., S. 79を参照。そこでは「断念しなすものは、不平等で、不公正な一般的交換(商品形態での交換)から身を離し、削減されない全体をつかもうとする。それはホワイトブックが「悪しきユートピア論の絶対主義」と呼ぶ要求である。(ホワイトブック前掲書、172頁参照)。ただ、『啓蒙の弁証法』が交換関係に規

定された充足に対して直接的に全面的充足のイメージを対置するのに対し、『否定的弁証法』の定式はより反省的な示唆となっている。つまり、現に普遍的と考えられているもの(この場合、市民社会の常識における幸福のイメージ)が諸個人の相互に排他的で不平等な関係を暗黙のうちに前提するかぎり、その二面性、局限性を露呈させていることに注意を喚起する。

(31) Theodor, W. Adorno, *Zum Verhältnis von Soziologie und Psychologie*, in S.S., S. 53.

(32) N.D., 264.

(33) Theodor W. Adorno, *Zum Verhältnis von Soziologie und Psychologie*, in S.S., S. 58.

(34) Ebd., S. 59. 24 頁での管理された世界の議論の再構成は、主に次の諸論考を引いた。Theodor W. Adorno, *Reflexionen zur Klassentheorie*, in S.S., 373ff. Th. W. Adorno, *Individuum und Organisation*, in S.S., 440ff. Friedrich Pollock, *State Capitalism: Its Possibilities and Limitations*, in A. Arato, F. Gebhardt (ed) *The Essential Frankfurt School Reader*. Urizen Books, New York 1978, S. 71ff.

(35) このような批判の例として、ジェニカ・メンジヤミン、およびマクセル・ホネットの論考をあげておきたい。Jessica Benjamin, *The End of Internalization*; Adornos Social Psychologie, in *Telos* 32, S. 42ff. Axel Honneth, *Kritik der Macht*, stw 738, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1989.

Adorno und Psychoanalyse

Makoto TAIJUDO

In seinem philosophischen Grundtext Negative Dialektik zeigte Adorno seine Beziehung zur psychoanalytischen Theorie. Dabei schätzte er die Theorie des Ichs von Freud als "Kritik der Ideologie des seiner selbst mächtigen Individiums" ein. Tatsächlich verwendete er die Freudische Theorie für Deutung der Erscheinungen in der modernen Gesellschaft; je unausweichlicher die universal vergesellschaftete Gesellschaft, desto höriger sieht der Einzelne auf ihre mangelhafte Rationalitätsform sich beschränkt. Seine Selbsterhaltung hängt nicht nur von der rationalen Verhaltensweise, sondern vielfach von den unbewußten Abwehrmechanismen ab.

Schlüsselwörter

Ich, Wiederholung, Unausweichlichkeit, Abwehrmechanismen, Universalvergesellschaftung.